



「このごろよく見聞きするようになった言葉の一つに「レジリエンス」がある。回復力とか復元力などと訳されるが、困難な状況に直面したとき、そこから立ち直ったり、うまく対応したりする力を指す。高い、低いという形容詞がひつついていることが多く、高めるためにはうんぬんかんぬん、と語られているのを目にするが、それだけ見ると根性とか、胆力みたいなイメージに引き寄せられてしまい、少々のことには動じないような人間がレジリエンスが高いってこととか、と思ってしまう。

ところが、近年ずいぶんと解釈が変わってきている。そう、最近読んだ本では、「困難な状況で必要なものを得る交渉力」とあった。要するに、「困った困った」を言う先がある、あるいは言えることがレジリエンスなのだ。これだとわかる。「困った」を伝えやすく、具体的な助言やサービスを得る手段がいくつもある人や社会はレジリエンスが高い人、社会と言える。

古くからの友人が電話をしてきた。家族がこの歳でパラバラになることになった。自分に非があるので謝罪の意味もこめて精一杯のことをするつもりだ。ただ、これから一人で老後を送るのは寂しくてしかたがないから協力しろ、というものだった。ところが、結局は、彼が示した精一杯が再び家族を結びつけた。後

日再度電話があつて「騒いですまなかった、お詫びに一席持つ」と言った。ほつとして、二人で笑った。人騒がせな話ではあつたが、ぼくはすっかり友人に感心した。世間体とかプライドを気にして、隠す、閉じこもる、我が身の中だけでクヨクヨと考えるという方向に行つたなら、この結果は得られなかっただろう。家族にも友人へもまずは交渉力を駆使することから始めたのが奏功した。レジリエンスの高い男である。

彼とは困難の種類が違うが、「困った、困った」に伴う経験をばくも今している最中だ。小学一年生の落語教室が話すにふさわしく、登場人物にも共感しやすいネタというのは古典落語中数少ない。遠からず尽きてしまうのは見えているので、絵本や児童文学からアレンジしようと考えた。しかし、手当たり次第に読むのでは、大海に針をすくうがごとくで埒があかない。そこで図書館司書さんたちに「困っています」と言つて、いくつかの条件を伝えて選書してもらつた。届いた候補作を読んでみると、面白いことに、外国の絵本や児童文学にもそのまま落語だと思えるものが多い。くつもあった。そうか、練り上げられたショートストーリー同士、親戚なのだ。そんなの当たり前、何を今さらという話なんだろうけれど、ぼくはそれに気づいてうんと得した気分になった。言ってみるものだ。

空き家 6

## 木幡智恵美

墓④

「今が一番いい時だね」。仕事と子育てとで、毎日が目まぐるしく、余裕も何もない時間を過ごしている頃によく言われた。(何が一番いい時だよ、身体も心もへとへとなのに) など、その時は心の中で反発していた。

土曜日は子守りに玉湯に行つたり、娘たちが子どもたちを連れて我が家に来たりする。玉湯に行つた時の娘の様子を見てみると、自分の仕事に行く準備をしながら子どもたちの世話をし、あれこれ指示をとばし、バタバタし通しだ。その姿を見て、かつての自分に向けられたあの言葉を思い起こす。一番大事なのは子どもを一人前に育てること。そのために仕事をし、その仕事ではあれこれの課題に取り組んでいく。心身ともに疲れ、余裕はなくなるかもしれないけれど、未来の目指すところに向かつている。子どもの成長過程にはさまざま問題が次々やってくるし、健康面での心配はつきものだ。そんな中で日々の成長を感じ、喜びを味わうことが多々ある。仕事では失敗もあるかもしれないけど、目の前の課題を解決した時の達成感には高揚し、出会った人との心の触れ合いに満たされた思いになる。そういう前向きに生きている時がすばらしいのだと思う。

「今が一番いい時だね」の言葉を掛けてきた人たちは、子どもたちに手がかからなくなり、年寄りの世話や、自分の衰えていく身体と向き合い、老後をどうするかといういわば坂を下りつつある境遇にあつたのかもしれない。自分がそういう立場になり、ようやくその意味が分かるようになった。私の場合、介護を終えると一気に坂を駆け下りていったような気がする。時間というよりは気持ちの上で大部分を占めていた介護がぼつこり抜けてしまうと、身も心も空洞化したような状況に陥り、人生の終焉を間近に感じるようになった。つまり、私の未来は自分の命の終わりになつてしまつたのだ。

最近良く言われる終活。家のことも墓のことも考えねばならない。ただ、そういうことばかり考えていると、トンネルの中に入りこんでしまった気になることがある。残された日々が限られているならなおさら、少しでも明るい気持ちになる毎日を過ごしたいのだが。

30代フリーター 災害や事故のニュースを見聞きするたびに、心の傷が体の傷に劣らず重視される時代になったのを感じる。

年金生活者 個人消費に占める選択的消費の割合が必需的消費のそれと肩を並べるまでに増大したことが背景にある。心による生産と消費が拡大し、それだけ心が損傷しやすくなった。

30代 どちらの傷も痛みを強いることでは同じだ。

年金 『痛みの文化史』（デイヴィド・B・モリス著、渡邊勉／鈴木牧彦訳）という本によれば、「生まれながらに痛みを感じる事ができない稀な人びと」がいる。「痛みを感じないで六メートルも飛び降りてしまう子供にとつては、遊び場は一ダースもの死の罾が仕掛けられている場所なのだ。苦しみと無縁でいられたら、と私たちはときに望んでしまう。しかし、おそらく私たちは奇妙な考えになじむべきだろう——痛みのないことではなく痛みこそが真の恩寵なのだ、と」

想は「感情」を骨組みとして成り立っている。吉本が『心的現象論序説』で「好く・中性・好かぬ」と呼んだ感情だ。

その感情はラカンの指摘に反して言葉以前のものの、「前ディスクールの現実」（『アンコール』）そのもののように見える。「好き」とか「嫌い」とか「好きでも嫌いでもない」といった感情は、それを言葉にする前に既に存在していると通常は思われている。だが、ラカンはそうした感情を持つ「男たち、女たち、子どもたち」を「シニフィアンでしかない」と言う。すなわち感情は言葉に支えられている、言葉なしに感情は起動しないと云っている。

30代 たとえば何かに頭をぶつけて、思わず「痛っ！」と叫んだとする。それはどんな感情を引き起こすんだ。年金 痛いと感じるのは感覚の作用だ。それは言葉なしに起動する。それに反応して「痛っ！」と叫ぶとき、あるいは声にはしないで心の中で叫ぶと

このことはフィジカルな痛みだけでなく、メンタルな痛みにも言えるだろう。私たちは心についても「痛みの感覚を役立てて姿勢を調整したり、位置を変えたりしている。そしてこのような微細な修正が連続して行われないと、私たちの骨格はそれを保護している関節の組織を損傷してしまい、炎症や感染が生じる」（同書）。体と同様に心もまた痛みを感じることができなければ、あちこちを損傷し、炎症を起こすだろう。

30代 痛みが強すぎると、損傷や炎症以上の地獄に導かれる。

年金 人は日常的に大小の痛みを感じながら生きている。痛むことは、心にとつても標準状態であり、医療やケアが必要になる強い痛み、激しい痛みは例外状態と言っている。また、標準状態の痛みにも度合いの変化があり、痛みが強めのとき、人は様々な言葉を声にしたり、頭の中で思い浮かべたりして、心を手当てしている。「痛っ！」という反射的な叫び、「クソ、あいつ

き、感情が生まれる。不安、恐怖、怒りなどだ。

「痛っ！」という叫びは、吉本の言語理論に従えば「一番大きな自己表出性と微弱な指示表出性から成り立った言葉」で、「感嘆詞に近い自己表出性を持った言葉」ということができる（「言語にとつて美とはなにか」角川ソフィア文庫版まえがき、『吉本隆明

め」という怒り、「これくらいで済んでよかった」といった気持ちの切り替えの「呪文」などが繰り返される。それが可能なのは、言葉が対象を指し示すだけでなく、心の位置と向きを決定する働きをするからだ。「痛い」のに、「痛くない」と言ってみたところで、痛みが消えるわけがない。そう言い切れるのは、言葉を対象を指し示す道具としてだけ見ているときだけだ。

30代 「言葉の力」とよく言われるが、フィジカルな力ほど明瞭ではない。

年金 ラカンの次のような指摘は、人間は生まれながらにして言葉に囚われていると言っているように受け取れる。

「男たち、女たち、そして子どもたちは、シニフィアンでしかないのです」（『アンコール』藤田博史、片山文保訳）

「男たち、女たち、子どもたち」はいずれも、吉本隆明のいう「対幻想」の領域に属する存在、つまりペアで成り立つ存在を指す言葉だ。男と女、親と子といったぐあいに。対幻想の「幻

全集8』）。私の理解では、自己表出とは、さつき言った心の位置と向きの決定、写真にたとえればアングルの決定だ。それが感情を起動する。だとすれば、私たちは言葉を使ってある程度まで感情をコントロールすることができるという考えに導かれる。

30代 そううまく行くか。年金 実行の方法を紹介する本がいくつも出ている。私もそれらを手がかりに、やっかいな感情とつき合っている。

もうひとつ言えるのは、痛みを恐れるあまり傷つかないようにしようとするればするほど、傷つくりリスクが増し、傷ついたときの痛みも大きいということだ。私は電車や店の中など人と接触しなければならぬ場所では、「どうぞ私を傷つけて」と頭の中でつぶやくようにしている。傷つけられるのではないかと恐れが和らぎ、心の硬直がほぐれるぶん、実際に打撃を受けたとき、柔道の受け身のようにそれを緩和することができる気がする。

## どうぞ私を傷つけて